

蛇女

『蛇女』 第三稿

脚本／小中千昭

Screen Play by Chiaki J. Konaka

99／11／04

登場人物

- 矢野 文(21)……………服飾モデル
- 守宮 一樹(32)……………生化学研究者
- 守宮 匡子 (20 / 外観) ……一樹の妹
- 猪瀬 昌寛(37)……………ブラックジャーナリスト
- 高梨 卓(26)……………匡子の別れた彼氏
- 谷川 佳美(28)……………猪瀬の助手兼愛人
- 小学生の男の子
- メイクアップアーティスト
- 中堅フォトグラファー
- 匡子のボーイフレンド(西麻布)
- タクシーの運転手
- フォトグラファーB
- スタジオアシスタント
- 明石 健治(27)……………文のマネージャー
- 樹莉(22)……………モデル
- 麗華(23)……………モデル

白骨夢

白い午後。

小学生低学年の男の子。

住宅街の道の真ん中に立って、じっと見つめている。

その視線の先には――

陽炎の中に立つ、長い黒髪の女。

顔は陰で見えない。

男の子は、じっと見つめている。

女は手に、大きな鼠の死骸を握っていた。

男の子の方を見ていたが――、おもむろにその鼠の死骸を口許に持っていき――

男の子「――！」

女の顎は、人のそれではない。それほど大きく開かれ、鼠を嚥下。

立ち尽くす男の子。

彼の視線の先に、黒髪の女などいない。

男の子「……」

ぬっ！ 男の子の背後にいきなり立つ黒髪の女。顔は見えない。

気配に気づく男の子。

振り向こうとして――

暗転。

メインタイトル

S「蛇女」

メイン・クレジットバック

赤黒いトーン。

暗い中で、男と、人ほどに太く長い白蛇が、互いの形も判然とさせぬ程に絡み合っているイメージ。殆どそれは抽象的な文様でしかない。

ノイズ――。

その音に、やがて混濁してくる女の声――

黒味

徐々に以下の会話が聞こえてくる。

女の声「――ちゃんとやってる？」

若い女の声「あ、はい」

女の声「若いからって油断してっとな、後悔するんだから」

若い女の声「……」

女の声「今はいいけど、この状態が永遠に続く訳じゃないの」
若い女の声「はい」

メイク室

きめの細かい頬の膚――。

それに触れる女の指。

フォト・スタジオのメイクアップ・ルーム。

暫く黙って、メイク・アーティストは、鏡の前に座っている若いモデル――、文の頬にファンデーションを塗っていく。

メイク「（独り言）睫毛長いよね……」

文「――」

文は、鏡に映っている自分の顔を見つめている。

若く、美しい。その事が、今の文の全て。

フォト・スタジオ

パシュ！ ピピピピピ

ストロボの音が響く。

白いトレペの壁に囲まれた、白いワンピース姿の文。
パシュ！ ピピピピピ

大きな、漆黒の瞳にストロボの輝きが映る。

その光が、文の顔を、否、文自身を別の存在にさせ

ている。

清楚な服を着て、ナチュラルメイクをしていても、
文の目は動物的にキラキラと輝いている。

パシユ！ ピピピピピ

（背後に代理店、A D R のモゴモゴとした会話がノイズの様に流れている）

フォトグラファ―「ちよつと静かにしてくれる」文ちゃん、だ
ったよね。えつとね、ちよい目線落とし気味にしてみよ
っか」

文 「（小さな声で）はい」

伏せられる文の目。長い睫毛――

カメラマン、ハッセルを持って文に近づいていく。
パシユ！ ピピピピピ

フォトグラファ―「（小声で）君の目の光、強過ぎるんだ」

文 「？」

フォトグラファ―「こんな安い仕事で見せる必要ない」

文 「――（ああ……）」

フォトグラファ―「――今度、ちゃんと撮らせてよ。勝負してみ
たいんだ。君を被写体にしてさ」

文 「――」

文、強い目でレンズを凝視する。

フォトグラファ―、ファインダから目を外し――
フォトグラファ―「（文に目を合わせず）フィルムチェンジ」

西麻布ノ夕刻

スタジオを出た文、街に向かって歩きだす。

化粧つきの無い顔、ザクツとした普段着。

この街では目立たない姿。

そのまま人ごみの中へ消えていく文。

ビル上のビルボードには――、文の横顔を大きく扱
った化粧品のポスター。

しかし道行く人は、そのポスターに写っている当人
がそこにいるなどは気づきませず――。

ぼうつ、と信号待ちで立っている文。
向こう側の歩道を歩く若いアベック。
ぼんやりとそれを見つめている文。
男は輸入物のスーツをラフに着込み、しきりに女の
方に話しかけている。

まだ幼さが残る面影の若い女、チラと文を見る。

文 「！」

女の凝視が、文を動けなくした。

『どういう事？』

混入する記憶

赤黒く濁った画面。

オフィスビルの廊下、らしい。

小さく息を呑む声が、女性用トイレから聞こえる。

当惑する文の目

『え……？』

混入する記憶ノトイレ

二十台後半の女、洗面台に手をつき、鏡の前に自分の
顔がくつつくばかりに背後から押されている。

汗ばみ、乱れた髪。苦悶の表情――。

しかし――、クスリ、と笑う。

当惑する文の目

嫌悪――。

混入する記憶ノトイレ

女は、背後に居る者の方に顔向ける。

濡れた唇が僅かに動き――

女 「――（囁き）こんな事が好きになったら――、（クス）あたし困るな」

交差点前

『いやだ!』

激しく被りを振る文――。

文 「……?」

うろたえる文に、まるで莫迦にした様な笑みを口の端に浮かべて見せ、去っていく女。

根拠の無い腹立たしさ。

文は横断歩道を渡るのを止め、背を向けて反対側へ足早に歩きだす。

文のマンション前/夜

コンビニの袋を下げ、帰宅してくる文。

住宅街の中に立つ中層のマンション。

玄関のロックを解除し、中へ

同/フロア

エレベータを降り、自分の部屋があるフロアに立つ

文――、歩きだそうとして、ギョツとなる。

文 「――」

文の部屋のドア前に、黒い人影が立っている。

男――、じっと俯き、微動だにせず立っている。

脅えた表情だった文――、次第に怒りを浮かべ――

文 「どういつつもり」

男、振り向く。

蛍光灯の暗い明かりで顔が見えた。三十前の若い男。文にはつりあいのとれた男、だった。かつては。

高梨「電話に出てくれないからさ」

怒りを鎮め様としながら、足音を大きくたててドア前へ進む文。

文「（小声・怒気）どうしてここまで来れたのよ」

高梨「え？ ああ、ちょうど出る人がいてさ」

文「恥ずかしくない？ そういう事して」

高梨「だって……」

文、慚然と高梨の脇を抜け、ドアの鍵を開ける。

高梨「未だ話、ついてないぜ。少なくとも俺は納得してないんだか——」

バン！ 眼前で閉じられるドア。

高梨「……」

俯く高梨。泣いている、らしい。

暫くして、力なくドア前から歩きます。

文の部屋

家具や調度は、若い女性の独り暮らしとしてはごく普通なもの。

しかし変わっているのは、外国の化粧品などの、女の顔を大きく扱ったポスターが壁中に貼られていること。

それに——、鏡が（異常過ぎない程度に）あちこちに置かれ、掛けられている。

キツチンのテーブルに無造作に広げられたコンビニの袋。

そして——、文は椅子に力なく座って、ミネラル・ウォーターの瓶を弄んでいた。

と、電話のベルが鳴る。

一瞥するが、無視する文。

やがて自動応答の音が再生される。

文の声「——ただいま外出しております。ご用件のある方は、発信音の後にメッセージをお願いします」

ぴー。高梨かと構える文——。

マネージャー「（電話）あ、フェイスの明石です。えつと明日のスケジュールの確認なんですが、朝十一時に成城区民会館に行って下さい。化粧品関係のイベントだそうです。私は明日も行けないんで、よろしくですー。では」

小さく吐息を漏らす文。

キツチンテーブルに置かれた鏡にふと目をやる文。

じつと自分の顔を見つめていたが――、

仕事 の笑みを浮かべてみせる。

イベント・ホール／舞台／翌日午前

スクリーンに映し出される、異景の荒野――。

赤黒く干からびた大地に、奇怪な尖塔が規則正しく佇立している――。

脅えきつた文の目。

しかし彼女の顔は動かす事を許されていない。

7

―― 樹「（オフ）この様に、ええ……、未だ若く、きちんと普段のケアをしている女性であっても、皮膚の老化は日々進み、それを抑止する事は出来ませんでした」

ぐい、ぐいと異景の荒野の光景を見る視点が移動。文の頬には、マイクロスコープのカメラ部が押しつけられている。

普段着のままの文、椅子に座らされ、マイクを持った男のされるがままになっている。

―― 樹「ああしかしこの人は本当に普段の手入れを怠っていませんね。さすがはプロのモデルさんです。普通だったら、この辺り、油分が深く溶け込んでしまつて、黒ずんでしまつてるところです」

堪えられない――。そう思っている文。

―― 樹「人間の細胞は日々分裂し、増え続けている。と同時に、細胞には死がプログラムされています。アポトーシスと呼ばれるこの機能は、人間にとって欠かさざるものです」

一 樹、やっと不快そうな文に気づき、カメラ部を離す。

一 樹「あ、ありがとう。もういいですよ。（聴衆に）アポトーシスがあるから人間は常に新しい細胞を活性化させ、生命を維持出来ている。しかし、同時に生物としての寿命というものを決定づけられてもいるのです」

文、よろけながら椅子から立つ。

誰も文の事など気にしていない。

文、目眩を感じながら舞台袖に向かって歩きだす。

一 樹「染色体の末端にある、このテロメアは、体細胞が分裂を繰り返す度に少しずつ短くなっている。これが人の老化を決定づけています。テキサス大学の研究によると、ここにテロメララーゼという酵素を与える事で、通常の細胞に比べ、二十回以上も多く細胞分裂を繰り返させる事に成功した——という報告は、製薬会社の皆さんは既に御存知かと思いますが——」

ピロティ

ホール外側のロビー。よろけながら、脇の廊下から抜けてくる文。

ドア前には札。

「ヨグ製薬（株）主催

講演・守宮一樹助教授」

ドアの内側からは、一樹の声が漏れ聞こえてくる。ロビーには他に誰もいない。受付も引き上げた後。立ち止まり、頬に掌を這わせる文。

深い溜息——。

『なんでこんな事をあたしが——』

極めて瞬間的なインサート・イメエジ

そこは陰になる筈の無い場所で、暗く潰れた女のシルエツト。

ハツとなって見回す文。

誰かに見つめられていた。

しかし、このロビーには誰もいない。
困惑し、俯く文——
再び目を上げると、勝気な光が浮かぶ。

グレイ電話の受話器を耳に当てている文。

文 「——（静かな怒気）こういう仕事は二度と入れないで下さい！——あたしだって——」

と、背後に人が立つ。

ハッと振り向く文。

文 「だから——」

そこに立っていたのは、舞台上で喋っていた男・一樹。感情を見せない顔で、じつと文の顔を見つめていた。

文 「——（受話器に）いいです。判りました。明日はちゃんと行きますから」

文、一旦一樹に背を向け、受話器を戻す。

文 「——訊いてなかったんです。こういうお仕事だって」
一樹「僕も——、聞いてなかったんだ……。その、本当にモデルさんが来るなんて」

ルさんが来るなんて」

振り向く文——驚く。

一樹、頭を下げていた。

一樹「申し訳ない事をしました。本当に失礼な事だった」
率直な態度に、心のガードを緩める文。

文 「手違い、なんです。じゃあお互いさまです」

一樹「製薬会社が変に気を利かせたつもりらしいんです」
微笑む文。

文 「いいんです」

変に空く間。

文 「えと、じゃあたし——」
ペコリと会釈して、一樹の脇を抜け、出口へ歩きだそうとする文に

一樹「ちゃんと、お詫びしたいです」

怪訝そうな顔で振り向く文。

一樹「その、もし嫌でなければ、ですけど」
文 「——」

その二人を、じっと見つめる視線。
低いポジションから――。

住宅街の中のカフェ/夜

ごく普通の住宅街。民家を改装して開業している小さなリストランテ。

ワインと、大皿に載った伊田舎料理。

『こんなところにこんなお店ってあるんですね』

『僕も通りがかって見つけたのです』

――といった軽い会話。

冗句は得意ではないらしい一樹。しかし文はよく笑って答えている。

そう、心惹かれていているらしい自分を感じていた。

テーブルの上には、守宮の名刺。

東都医科大助教授、である事が判る。

ふと、会話の合間に、文は一樹の手元に目を落す。

左手に指輪は、はめられていない。

そんな事を気にする自分が、少しだけ嫌になり、顔を曇らせる文。

一樹「――どうか、しました？」

文「――ううん。なんでもないです。(時計を見て)あ、あたしそろそろ……」

一樹、カウンターに『チェック』のサインをし、

一樹「門限でもあるんですか」

文「(きよとん)――(笑)そんなんじゃないです。あたし、出来るだけ十一時半には寝たいんです」

一樹「えっ？」

文「膚の新陳代謝の為にはそれくらいに寝ておいた方がいいんです」

一樹「――プロのモデルさんって、みんなそうなんですか？」

文「そうじゃない人もいますけど。あたしは――、まだまだ働きたいし」

一 樹「そう、ですか……」

文「——何か、まだ……？」

見るからに落胆した様子の一樹を見て、文、少し可笑しい。

一 樹「いや、その、折角知り合えて……」

文「……」

文は、意地悪にわざと黙っている。

一 樹「——その——、こういう時は、何て言うべきなのかな。

今夜は——、楽しかったし——」

汗が吹き出している一樹——、拭おうと上着のポケットに手を入れようとして——、

一 樹「あっ」

赤ワインのデカンタを倒してしまう。

文「！」

文の服に、まるで血の様に飛沫がついた。

椅子から飛び立つ一樹

一 樹「す、すまない！ ああ……」

一樹、ハンカチを胸から出して、文の服を拭おうとし——、躰に触れる事に気づいて手を離す。

文、黙々とそのハンカチで染みをとろうとする。

一 樹「本当にごめんなさい……。ウチがすぐ近くだから、そこで着替えて——」

文「大丈夫です。すぐ洗えば落ちると思う。ちょっとお手洗い貸して下さい」

ウェイターに教えられ、洗面所へ向かう文。

自己嫌悪で疲れている一樹、椅子に座り込む。

洗面所

蛇口の水を流し、服の染みをハンカチで叩いて落している文——。水で染みは薄く広がってしまった。

文、鏡を見る。

自分の、今の、顔——。

文「——」

店内

文が出てくると、一樹は勘定を終えたところ。

一樹「街に出れば、まだ洋服を買える店があるかもしれない。

僕が——」

文「——洗えば平気です」

一樹「しかし——」

文「（固い顔で）——守宮さんの家、近くなんでしょう」

一樹「——」

タクシー車内

暫く黙り、並んで後部席にいる二人。

一樹「（小声）——服は——、弁償します。本当に申し訳ないです」

文「——そんな高い服じゃないから……」

運転手「ええと、そろそろ代々木八幡ですけど」

一樹「先を左に曲がって」

文「——独りで住んでるんですか？」

一樹「え？ いや……」

文「……」

守宮邸前

旧家風の作り。

東京とは思えない路地。

タクシーから降りる二人。

一樹、呼び鈴を押し、門を開ける。

文、促されて中へ。

守宮邸

玄関の格子戸の前に来る二人。

見回す文。

こんな古い家……。

一 樹「古いでしょう。住んでいて嫌になる（苦笑）」

鍵を開け、扉を開く一樹。

一 樹「妹は留守らしい。どうぞ」

玄関に入ると――、暗い廊下がずっと伸びていた。

文「……」

おおおおおんんんん……

低く、響く、唸り。耳鳴りの様な、機械音の様な。

文「――（徐々に恐怖を感じる）」

文の目には、その暗い廊下は、深遠なる心の闇へ連なる洞窟の様に見えていた。

その奥には、自分の卑しい心が――。

いたたまれない文。

一 樹「洗面所は奥です。今妹の服を何か探してきますから、ど

うぞあがって――」

文、後退る。

一 樹「――文、さん？」

文「――あたし――、やっぱり帰ります」

文、門の方へ駆けていく。

一 樹「文さん！」

文の部屋

鍵を開け、入ってくる文。

暗い室内に明かりが灯る。

深い溜息を漏らし、文、バッグをテーブルの上に。

チラと鏡を一瞥する文。

自分の顔ではない。こんな青ざめ、皮膚が渴ききつた――。

冷蔵庫からミネラル・ウォーターを出し、カウチに
よろけながら向かって――、座り込む文。

瓶の蓋を開けるのも億劫な程に疲れている。

文「――」

ぼんやりと、壁に貼られたポスターを眺めている文。
と――

カウチの下に青白い紐状のものが見え隠れする。
しかし文は気づかない。

文 「『ふう……』」
やっと人心地がついてきた。

カウチのソファの上に置いていた瓶をとろうとする
と――、瓶、床に落ちる。

文 「……」
文、身をずらして瓶を拾おうと手を伸ばす。

瓶のすぐ脇には――、小さな青白い蛇が舌を伸ばし
ている。

思ったところに無い。

文、更に身をずらして瓶を手さぐりで探す。
その手のすぐ近くに――蛇。

文 「『あれ？』――『どこよ』――『え』――『なに？』」
徐々に、何がそこにいるのかという脅えが湧きたつ。
文、意を決して飛び起き、カウチの前に立つ。

文 「――」
瓶が転がっているだけ。

文、身を屈め、カウチの下を覗き込む。
動くものの姿は感じられない。

文 「――」
フラッシュの明滅――。

スタジオ/翌日/午後

前とは違うフォト・スタジオ。

バシユ！ ピピピピピ

バシユ！ ピピピピピ

普段の文とは思えない、毒婦の様なメイクを施され
た顔。

強い目の光。

じつとハッセルのレンズを覗む。

バシュ！ ピピピピピ

文、ストロボの方に気が向いてならない。

バシュ！ ピピピピピ

チラ、チラと明滅するストロボの方を見てしまう。

フォトグラファーB「（オフ）目線こっちよ！」

文、『あ』と、すぐにレンズを見るが――

バシュ！ ピピピピピ

明滅するストロボ、それを見なくてはならない強迫

観念。

文「――（幻惑されていく様な感覚）」

残像。いびつな丸い形――

蛇の目。

文「！……」

視界がかすんだ。

フォトグラファーが何か言っているが、まるで耳を

塞がれた様にくぐもって判然としない。

視野が狭窄していき――

暗転。

スタジオロビー

力無く椅子に座っている文。

スタジオ・アシスタントが機材を持って脇を通りか

かる。

アシスタント「お疲れ様でした！」

文「あ……」

答える気力も無い。

汗をかいている事に気づく。

『いやだ……』

大きめのバッグを開き、ハンカチを探そうと中をま

さぐる。

文「……」

洗って綺麗に畳んだ、男物のハンカチ。一樹のもの
だった。

文 「——（決意）」

東都医科大キャンパス

来た事を後悔はしていない。

しかし、同じ年頃の、全く異なる生活をしている者たちが集っている場合は、文に疎外感を与えている。モデルの文の方がよほど地味な服装。

文は伏目がちに歩く。

受付で案内を受けている文。

『わかりましたありがとうございます』

一礼して歩きだす。

研究室棟

中庭を抜け、古い建物に入ってくる文。

異臭——薬品の臭いが微かにして、眉を顰める。

見回し、階段を昇っていく。

二階のフロアに上がろうとすると——、

文 「あ、すみません」

ぬっと出てきた男とぶつかりそうになり、避ける文。

男は会釈し、脇を抜ける。

文、廊下に並んでいるドアのプレートを読んでいく。

『守宮研究室』

文 「——」

ノックをしようかと躊躇をする文——、と、

文 「!?」

はっと元来た方に振り向く文。

階段のところで、すれ違った筈の男が不自然なポーズで立って、じっと文を見つめていた。

文 「『何!?』」

中年の、ややすさんだ感じの男。わざと目立たない様なスーツを着ているらしい。

文に見つめられ、さっと視線を逸らし、階段を下つていく。

文 「（呆然）——」

ガチャ

一 樹「あ」

文 「！」

ドアを開けて一樹が出てきた。

一 樹「——君……」

文 「——（微笑）見学に来て、って言ったでしょ。覚えてま

せん？」

一 樹「——（苦笑）」

守宮研究室

古びた建物の部屋としては、かなり近代的な室内。こじんまりとした部屋ながら、端末関係、計測機器は最新のものが置かれている。

独り、部屋の中をゆっくり見て歩いている文。

端末のディスプレイには、図式化された蛋白細胞の塩基配列が延々とメタモルフォーゼを続けている。

文 「『ふうん……。あ』」

思わず後退る文。

棚の上に、飼育籠がいくつも置かれており、その中には蛇がいた。

顔を歪め、その場から去ろうとする文——。その脇の籠に、ウサギが二匹、飼育されているのに気づく。
『かわいい……』

ハツとなる文。このウサギは——

一 樹「（オフ）そのウサギは餌じゃない」
振り向く文。

すぐ背後に一樹が立ち、手には紙パックのコーヒーを持っていた。

一 樹「——女性は蛇を嫌うけれど、女性にとって蛇は極めて親しい動物なんです」

文、ふと、ウサギに目を落す。

鼻をひくひくとさせながら無心にキャベツを食べているウサギたち——。

文 「……」

一抱え程もある、アクリル樹脂のチューブ。

無数の電極が上下の封をしている金属蓋から伸びている。中にはやや濁った液体が満たされていた。

文、漠然と、しかし直感的に察する。

ウサギと、タンクを交互に見て、何がこのウサギの身に起こるのかを予感する。

文 「——そのウサギ達も——、実験で使うんですか」

一 樹 「——（小さく嘆息）仕方ないんだ。理論だけでは科学は進められない」

文 「——いつまでの、命なんですか」

一 樹 「（微笑）寿命まで」

一 樹 「そのウサギたちは既に実験の被験者だ。その浸透液槽に何度も入っている。でも元気でしょう」

文 「（ちよつと安堵）——そう、なんですか」

一 樹 「タンクの中では昏睡状態で殆ど呼吸をしないで済む。極めて微弱な電荷を与えて、細胞に酵素を浸透させるだけだからね。こういう実験でも、反対する団体がある」

一 樹、ウサギに水を与える。

一 樹 「こいつらは、人間の年齢に換算すると、百二十歳になる」

文 「——すごい寿命……」

一 樹 「（笑）確かに。ただ、僕の実験は寿命を伸ばす目的ではない。これは結果的な副作用なんだ」

文 「——でも、すごい実験、じゃないんですか」

一 樹 「もし賞をとったら、一緒にジュネーヴに行こうか」

文 「（きよとん）」

一 樹、独りで笑う。
じつと一樹を見つめる文の目。
——来て、良かった。正しかった、あたしは。

下北沢／夜

若者達でこったがえす夜の下北沢。
楽しそうに会話をしながら歩く文と一樹。
そう、文は幸せだった。今度こそ。本当に――

バー

若い客向けに作られた店。ビルの上であり、窓に向いて二人が並んで座る様になっている。
店員はわきまえており、呼ばない限り側へは来ない。
文と一樹は、ほんの少し、中途半端に距離をおいて並んでいる。
ひとしきり、互いの事も話してしまった。
今の段階で語れる事は。

一樹「あ、えっと、お代わりは」

文「まだあるからいいわ」

一樹「そう……」

チラと一樹を見る文。

明らかに落ち着かない態度。

一樹「――ああ……、君には門限があつたんだっけ」

文「門限なんかじゃないって言ったでしょう。それはあたしが決めている事。あたしの意志で」

一樹「――（ふ、と思案気）」

文、一樹を見つめ――、ふっ、と窓の外側のネオンに目をやる。

一樹、文の美しい横顔をじっと見つめる。

一樹「――」

遊歩道

遊歩道脇の道にタクシーが停まり、文、そして一樹が降りる。

二人、緩い歩調で並んで歩く。

一 樹「——なんだかおかしいね」

文「え？」

一 樹「お互いのこれまでの人生を語り合って、親しくなった、
と思ったら、お互いに話す言葉が見つからない」

文「——言葉とか、要らない時もある」

一 樹「……」

一 樹、立ち止まった。

文、数歩先で立ち止まり、振り向く。

文「——」

一 樹、文の前に進んで肩に手をやる。

文「——まだ手も握ってないのに」

一 樹「慣れてないんだ、こういうの」

文、くすつと笑みを浮かべ——、一樹の頭に手を回して——、

二人、口づける。

最初は触れるだけ。

一旦顔を離し、見つめ合う二人の目。

今度は一樹が、文の頬を抱く様に口づける。

うつとりと目を閉じる文——

文「二三」

目を見開く文。

しかし未だ一樹は口づけている。

ビクン！ 文の躰が震える。

それでも一樹は未だ離さない。

文「（呻き声を漏らす）」

必死に一樹をひき剥がし、よろける文。

一 樹「ど、え？ 何……？」

文、呆然としながら自分の足を見る。

文「（小さく）ひいっ」

一 樹「！」

文のくるぶしの辺りにひもがまとわりついている。

否——、それは青白い、蛇。

それが咬みついていた。

文 「いやああああっ！」

足を必死に振り回し、蛇を振り解く文。

一 樹「だめだ！」

蛇、向こうに投げ出され——、茂みへスルスルと消えていく。

うづくまる文。

一 樹「大丈夫か」

文 「痛い……」

傷口を見入る一樹。

一 樹「——まずいな、引き剥がす時、傷を抉った——」

文 「早く——あたしの家へ——、連れてって……」

一 樹「——いや、僕の方がいい」

一 樹、文を抱きかかえる。

タクシー車内

青白い顔でぐったりとしている文。

一 樹「（運転手に）そこを左に曲がったところで止めて」

ぼうつとした頭で薄目を開ける。

あの、古い日本家屋の塀が見えた。

守宮邸ノ玄関

格子戸を開け、顔を覗かせる若い女。

文を肩で抱えながら入ってくる一樹。

一 樹「怪我をしているんだ。手当てをするから」

混濁した頭で、若い女を見る文——、衝撃。

フラッシュノ交差点

横断歩道の向こうを、若い男と歩いていた少女。

文を見て、莫迦にした様な目で笑った。

玄関

文の靴を脱がせる女。

あの時とは別人の様に、地味なワンピース姿。化粧
つ気も無く、少女然としている。

一 樹「座敷に布団を敷いてくれないか」

黙って奥へ向かう少女。

ぼんやりと、一樹の腕の中でそれを見送る文。

座敷

敷かれた蒲団の上に横たわり、天井を見つめる文。

廊下の向こうでくぐもった声。

何か小声で言い争っている様子。

文「――」

ミシ ミシ 廊下をこちらに向かって歩いてくる者。
身構える文。

襖が開き、一樹が救急箱と数本の薬瓶を持って入っ
てくる。

文「あたし――毒が回ってるの……？」

一 樹「あれはアオダイショウだよ。毒なんかない」

一 樹は手慣れた手つきで、文の足の消毒を始める。
染みる痛さに、顔を歪める文。

文「うっ」

一 樹「ただね、細菌は持っている。アオダイショウは別名鼠蛇。
鼠を食べてこの東京で生き延びている」

文「――詳しい、んですね」

消毒薬の後、一樹は持ってきた薬瓶から黄緑色の透
明な液体をガーゼに浸し、文の脚にあてる。

文「それ、何ですか……？」

一 樹「（無視して）良かった。変な傷にはならないと思うよ。
明日、一応外科に行った方がいいけどね」

文「――」

一 樹「モデルさんの躰に傷をつけるなんて。とんでもない奴だ。」

損害賠償ものだね（微笑）

文、笑えない。

一 樹「――」

立ち上がる一樹。

一 樹「今夜はここで寝てください。僕は向こうにいるから、何かあつたら声をかけて」

文「――」

部屋を出かかって、一樹、

一 樹「――ごめんなさい。僕が不注意だった」

文「さっきの人、誰なんですか」

一 樹「え？ ああ、妹、です。匡子といいます。愛想がない奴で……」

文「妹……」

一 樹「――じゃ、おやすみなさい」

文「おやすみなさい」

閉じられる襖。

――時間経過――

足首に巻かれた包帯。

びくん。脚が僅かに動く。

部屋に僅かに響く、文の荒れた吐息。

不浄の気。それが部屋を包んでいる。

文、うなされている。

顔には汗が滴り、膚は紅潮し、過酸素症の様に荒く息をする。

閉じた瞼の下で激しく動く眼球。

天井――、柾目――、

隅の陰の黒い闇――

目を開けている文。じつと天井を見つめている。

暗い闇の中を、ズルズルと下ってくる紐。

否――蛇。

文はただ凝視している。恐怖する事も忘れ。

ずるずる ずるずると壁を伝って降りてくる蛇。

じつとそれを目で追う文。

文「――」

自分の足元の方に目を落すと——、そこに、人の影が。輪郭がぼんやりとしているが、こちらに背を向けて座っているらしい。

急に恐怖の感情がこみ上げる。

しかし——動けない！

呼吸すら出来ないのか。

ただ目を開け、見つめるだけ。

必死に動こう、ここから逃げ出そうともがく文。

暗がりの人影、輪郭が明瞭になっていく。

文 「（叫びだそうと口をパクパク）」

それは——、長く黒い髪の、女——。

きゆうゆう……。

小さな動物の断末魔。

文 「！」

女が——、こちらを——、ゆっくりと——、振り向

こうとしている。

文 「『やだ！ やだ！ やだ！』」

長い黒髪の女、こちらを——、向くと——、

耳元まで割れた口から——、鼠の尻尾がびくびくと

動きながら垂れ下がっている！

文 「『やだ！ やだ！ やだあああああ！』」

女の横顔——、首——、鼠が喉を降りていく、その

シルエツト——。

文の悲鳴「いやああああああ……」

はっ、と起き上がる文。

汗にまみれている。

部屋の中は、豆電球でそんなに暗くなっていない。

やっと、今のが悪夢だった事が理解出来た。

文 「（深い嘆息）」

喉が、乾いた。

廊下

ミシ ミシ。旧家の長い廊下を歩く文。
少しだけ、脚を引きずっている。痛みではない。無
意識の所為。

迷路、という程広い訳ではない。しかし随分と長い
間、文は廊下を歩き続けている。
いったい台所はどこなのだ。

そして、そこにいる、と言った一樹はどこに。

文 「——」
眉を顰める文。

暗い廊下に、赤い光が漏れている。

「ん……。低く唸っているコンプレッサの音。

分厚い引き戸が薄く開き、そこから内部の明かりが
漏れているのだ。

文 「……」
ゆっくり、そこに近づいていく文。
薄く開いた隙間。その前に立つ文。

文 「かずき……」
声を掛けようとし、やめる文。
中から衣擦れの音が聞こえたのだ。

文 「——」
文、そつと隙間に顔を近づけ、中を覗く。

文 「——」
部屋の中は、随分昔に設えられた実験室。
大学研究室とは異なり、年代物の大きな計測機器な
どが並んでいる。

そして——、その隙間——、奥の研究机の前で、二
人が抱き合っていた。

文 「——」
二人——

机に腰を掛けた匡子。こちらに背を向け、その匡子
を抱いている、一樹。

匡子はくすくすと笑い声を漏らしている。

一樹は無心に匡子の髪の毛の匂いを嗅ぎ、頸に唇を這わ

せている。

くすくす、くすくすくす。

匡子の真つ赤な口紅を塗った唇が半開きでわななく、
文の表情から血の気が失せる。嫌悪。

匡子の脚が一樹に絡みつく。

そして――、匡子が目を開いた。

覗いている、文をじっと見つめて微笑んでいる。

あの時の様に。

ビシ！

思わず強く扉を閉じてしまう文――。

はっ、となり、いたたまれず、その場から足早に逃
げ出す。

廊下を進む。玄関はどっちら

背後で引き戸が開いた。

一樹「(オフ)文さん！」

文、振り向かず、走っていく。

玄関が見えた。

守宮邸外

もどかしげに靴をつっかけて、文、ヨロヨロと出
くる。

さつき脚を引きずっていた筈なのに――、文は素早
く走って門を飛び出していく。

ややして出てくる、一樹。

はだけたガウンの裾を直し、深い後悔を顔に出して
いる。

一樹「――」

はっとなり、振り向く。

玄関の中で、匡子がじっと一樹を見つめていた。
今は、笑っていない。

一樹「――」

文のマンション／翌朝

文の部屋

きちんと着替えないまま、ソファで寝てしまっ
た文——。

目が、覚める——。

未だ頭が朦朧としている。昨夜の事は、未だ現実の
事とは思えないでいる。

ゆっくりと身を起こし、ソファに座る文——。

どこに居ても、この部屋の中に居る限り鏡が文の顔
を映し出す。

文 「——『酷い顔』——」

文、上着を脱ぎながらバスルームの方へ。

シャワーの音がドアの向こうから聞こえる、無人の
部屋。

と、電話がコール。

ややして、留守電メッセージが再生される。

— 樹「（電話／オフ）——守宮です……（沈痛な声）。

きちんと——、説明をしたい。君に、本当の事を話して
おきたい」

バスルームから髪を拭いながら文、出て来る。

文 「！」

— 樹「（電話／オフ）このまま終わっていいとは思えないん
だ。——今夜八時、最初に会った時の、あの店に来て貰
えないか。何時までも待っているから」

プツ。ツ— ツ— ツ—……

無表情で聞いていた文——、あ、と思い出し、自分
の踝を見る。

文 「——？」

屈んで触ってみる。

赤く痣の様には残っているが、傷は既に癒えていた。

文 「……」

モデル事務所／午後

手帳を広げ、マネージャーとスケジュールの打ち合わせをしている文。
仕事の顔――。

地下鉄車内

空いている車内だが、文は立っている。
背筋と脚の腱を伸ばし――。
暗い窓に写る自分の顔に、ふと目をやる。
大丈夫。プロの顔だ。

会議室／オーディション会場

椅子に座り、審査員達の前にいる文。
審査員の姿は見せない。

文　「――今年で四年目です。」

専門学校に通って、今の事務所に入りました。ええ、自分で。

シヨウ・モデルとしては身長が足りません。今の仕事を――、続けられるまでは……。

いえ、プロだったら、やると思います。私は――、プロです」
文、艶然と微笑む。

代々木八幡駅／夜

改札を出て、階段を降りてくる文――。
腕時計を見る。

九時半――。

文 「――」

住宅街のリストランテ

歩いてくる文――。

店が見えた。脚を止める。

離れたところから、じつと店を見つめる文。

もう客は疎ら。隅の席に独り、座っている一樹。

文 「――」

固い表情のまま、一樹を見つめる。

自分でも、どうしてここにいるのか判らない。

店のマネージャーが、一樹にオーダーストップを報告に来た。

文、そつとその場から離れ、歩きだそうとすると

文 「――」

すぐ背後に、匡子が立っていた。

少女らしい格好、メイクもしている。

文 「――」

匡子「キスしたんだってね」

文 「――」

匡子「ウチに来る前に。一樹と」

文 「そんな事まで……」

匡子「（くすくす）兄妹だもん。話すんじゃない？ それくらい」

文 「――」（嫌悪）自分達が何をしているのか判ってるの？」

匡子「別に……。女と男が一緒に暮らしてるんだよ。自然な事だっと思ってない？」

我慢ならなくなった匡子――、必死に罵る言葉を探そうとすると――

一樹「（オフ）よせ！」

文 「――」

振り向く文。匡子も険しい目を見る。

店から出てきた一樹、泣きそうな顔で近づいてくる。

一 樹「——来て、くれたんだ」

文、目を逸らし、駅の方へ足早に去っていく。
不自然な距離で立ち、文の方を見ている二人——。

文の部屋

じつと、鏡に写る自分の顔を見つめている文。
心の中はカオス。

東都医科大／教室／翌日午前

広めの教室。疎らな生徒たち。

講義をしている一樹、声に力無く、ロボットの様な
口調。

一 樹「アデノウイルスは、E1Bという蛋白質を生成しますが、
これはアポトーシスを抑制する機能がある事が知られて
ます。これはp53と機能的にはほぼ同じもので、これを
巧く利用すれば、ヒトの皮膚老化を抑制する事が可能と
なる訳で——」

一 樹、ふと最後部席に目をやり、ギョツとなる。

そこには、文が学生の様な風情で座っていた。

一 樹「——（文を見つめたまま）もちろん——、細胞が寿命を
迎えず生き残り続ければ、様々な障害も併発しますが、
ネクローシス、つまり細胞の壊死を恣意的に制御する事
が可能ならば——」

文「——」

一 樹「もし、可能であれば——」

文の目は魅惑的だ。一樹は決心をしていく——。

一 樹「可能にさせる——。それが、科学というものだ。私はそ
う思っている」

一番前に座って、独りまじめに聞いていた学生、怪
訝そうな目を一樹に向ける。

一 樹「——じゃあ、ビデオを見て貰います」

一樹、教室背後に合図。

自動的にカーテンが閉まり、スクリーンが下がって
プロジェクターがビデオ映像を映写する。

(ミクロ映像の細胞分裂の映像)

学生達は、頬杖をついたりしながら、つまらない映
像に目を向けている。

一樹、ゆっくりと教室最後部へ歩いていき――

文のすぐ後ろに立つ。

一樹「家を出たよ」

文、振り向かず、しかし

文「(意外)え……」

一樹「匡子と一緒に長く暮らし過ぎたんだ僕は。僕が本当に
愛したいのは――、君だけだ」

文「……」

文は、スクリーンに映る細胞分裂を見つめ続ける。

一樹「――許して――、くれないのか……」

文「――」

力を落とし、立ち去ろうとする一樹。

と、文、席を立つ。

一樹「――」

文、一樹の顔に両手を伸ばし、自分の顔に引き寄せ

文「(囁き)あたしが目を覚まさせてあげる」

一樹「――」

文「あたしなら出来る。信じる?」

一樹「(胸が苦しい)――ああ……」

文、艶然と微笑む。

一樹「文……」

渴ききつた唇を、文に近づけようとする一樹。

さっ、と身をかわし、文、教室を出ていく。

暗い教室に、光が一瞬差し込み、そして閉まるドア。

中庭

校門に向かって歩いていく文――、唇に、笑みが浮

かんでいる——。

その文の姿を見つめる、目。
木陰から姿を現す中年の男。

以前、研究室棟で文がすれちがった人物が、文をじつと目で追っている——。

フォトスタジオノドレッシングルーム

メイクを終え、着替える前の、下着姿の文が独り。
机に置かれた衣装を前に、ふっと疲れた顔。

と——

一瞬、あの視線が。

一気に室内に、瘴気が立ち込めた。空気が重くなり、あの鈍く響く音が文を取り巻く。

文 「!?」

鏡の中——、背後のカーテンの隙間から、じつと覗いている目。

文——、それを凝視。

こんなものは幻影だ。ここに居る筈がない。

文、恐怖に必死に抗い——、きつ、と振り向いてカーテンの前へ。

一気にカーテンを開ける！ と二

文 「二」

奥の壁にもたれ、悪戯っぽい笑みを浮かべ、匡子がそこにいた。

文 「（動転）——な……、にしてんのよ……、こんなところで」

匡子「ふうん……、綺麗な膚しているのね……」

文にまわりつく様に近づく匡子。

文 「やめ——」

と、ドアの向こうから若い女達が笑いながら近づいてくる声。

文、咄嗟にカーテンの内側に入って閉める。

入ってくるモデルの樹莉と麗華（台詞、適宜ドキュ

メンタルに)。

樹莉「——つでさー、ウォーキングなんて出来ないじゃない、あたしとかー。急に言うなって」

麗華「あの雑誌、来月でなくなるって聞いた？」

樹莉「ねーねー聞いてー、こないだのオーディションでさー」

カーテンの向こうの会話が聞こえてくる。

じつと見つめ合う、内側の文と匡子。

匡子「——(囁き)あたしたち、仲良く出来るかもしれない」
文「(小声)何言ってるのよ!」

カーテンの中の声に気づく二人、「ん?」

麗華「——矢野さん、中にいるー?」

うるたえる文。

匡子「(文の耳元に)ずっと、今のままでいたって、思わない? 二人で一樹を愛するの」

文「やめ……」

麗華「(オフ)矢野、さん?」

文「ご、ごめんなさい! ちょっと、あたし今——」

樹莉と麗華、クスクスと何か言い合い笑う。

樹莉「先入ってますからー」

麗華「ごゆっくりー」

出ていく二人。

間近で見つめ合う文と匡子——

文、決然と匡子突き放す。

ズルツ、と床に座り込む匡子。笑みを浮かべている。
文「——(見下ろし)まともじゃない。あなたも、一樹さん
も——」

匡子「(ニヤニヤ)」

文「あたしが——、あたしだけが——」

文、カーテンを閉めて飛び出す。

フォト・スタジオ

最初と同じスタジオ、同じフォトグラファー。
キャリア・スーツを着た文と、もう二人のモデルが
ポーズをとっている。

有線のBGMがけたたましく鳴り響く。

バシユ！ ピピピピ

フォトグラファー「右の子、もうちょっと歯を見せて。OK」

バシユ！ ピピピピ

フォトグラファー「動いて——、動いて、そう」

ポーズを変えていくモデルたち。

フォトグラファー「目線はずっとこっちな。文ちゃん、もうちょい脚を開いて」

文、艶っぽく笑みを浮かべながらポーズを変える。

フォトグラファー「もうちょい」

バシユ！ ピピピピ

フォトグラファー「もうちょっと開いて」

バシユ！ ピピピピ

文、ポーズを変えるが——

フォトグラファー「もうちょっと開こうよ」

ファインダの中の文、突如笑みをかき消し、ポーズ
をやめてツカツカとフォトグラファーの前に向かい

文「（大声）どういう事よ！ これはカタログの写真じゃな

いのよ！なんで男が喜びそうなポーズとらなきゃけない

いのよ！」

フォトグラファー「（口ごもる）いや別にそういう意味じゃなく
てさ……」

他のモデル二人、ヒソヒソと耳打ちしながら笑う。

文「仕事してよ、プロなんですよ」

フォトグラファー「（自閉症的に、判読不能な独り言）」

侮蔑の目を向ける文。

ドレッシング・ルーム

スタジオ脇のメイク／着替え室。

モデル達が脱ぎ棄てたキャリア・スーツを集めていくスタイリスト。

スタイリスト「——勇気あるよね、最近の子って」

明らかに厭味。

モデルの樹莉と麗華、クスクス笑って——

樹莉「あいつ一度痛い目見せたいとか思ってたんだよね」

麗華「文ちゃん、逆ギレすると怖いんだあ」

文「……」

平然とメイクを落している文。

樹莉「——わー」

無遠慮に文の顔を間近に覗く樹莉。

文、？

樹莉「——毛穴全然見えない……。すごい文ちゃんの膚って

子どもみたい」

麗華「——（真剣）ね、何使ってる？」

文「別に、ないけど」

麗華「嘘だよ、教えなさいよ、絶対前より綺麗になってる」

樹莉「えっ、何使ってるって」 教えて教えて」

文——、ニツ、と笑った。

スタジオの廊下

文 「お疲れさまでした」

大きなバッグを肩に、普段着姿の文、ドレッシング・ルームから出てくる。

薄暗い廊下——、文、出口に向かって歩こうとする

と——

ズル ズルズル……

濡れた紐を引き摩る様な音——

立ち竦む文。

文 「——何……？」

突如、その空間が異界の如き変容を果たす。

そこは守宮家の廊下の様であり――

文 「（脅え）」

あのイルージョン――、白昼夢の道にも重なり――

文 「蛇……（泣きそう）」

蛇――。

ぼうつと立つ、黒い人影。

長い髪の女――。

口が――、耳元まで裂け――

文 「やだああ!!」

反対側へ駆けだす文――、そこは既に元のスタジオの廊下。

と！そこに立っていた人物とぶつかる。

文 「!?」

戸惑った顔で立つ、中年の男。

文、脅えが急激に怒りへ転化。

文 「何なのあなたは」 あたしを尾け回してどうするつもりなのよ!!」

男 「――今、蛇、つて……」

文 「誰なのよ!!」

男 「あ、――こういう者なんですけど」

男、尻のポケットから財布を出し、指につばをつけて、端の折れた名刺を一枚出して文の前に出す。

文、手にとらず、読む。

文 「猪瀬――、経済研究所――？」

男 「市場調査会社です。猪瀬、私です」

文 「――」

スタジオ近くの駐車場ノタ刻

地上げにあって、臨時のコインパークとなっている

そこに、二人立つ。

文 「あたしがどうしてあなたに調べられなきゃならないの」

既に激情は去り、いつもの文に戻っている。

猪瀬「——良かった。いつものあなたに戻られたようだ」

文「え……」

猪瀬「さっきもそうでしたけど、このところあなたは、自分の感情をコントロール出来なくなってますね」

文、心の奥で衝撃を受け止める。

猪瀬「それと——（煙草に灯を点け）、これは男の私にはよく判らない事なだけけれど……、最近、肉体的な変化も出てないですかね……」

文「——どうい……」

猪瀬「そこがよく判らない。例えば——、体温が低く安定する。膚からシワやたるみが消え、毛穴が小さくなって——」

文「——」

猪瀬「覚えがないのに生理が止まる。そんな感じですか」

文「——なんでそんな事——」

猪瀬「そういう人が、前にいたんです——」

フラッシュバック

オフィスの女子手洗い。

背後から快樂を得ている、女——。

駐車場

文「——誰、なんですか」

猪瀬「——私のね……、部下っていうか……。 （嘆息）結婚、してもいいと、思ってた……」

文「……」

猪瀬「——私、一度失敗してましてね……、臆病だったんです。——ぐずぐずしてるんじゃないかった……」

文「——何が——、あつたんですか」

猪瀬「——」

インサートノビルの谷間／夜明け

雑居ビル同士の狭い谷間。

屋上から転落した女の脚部。

そこら中に、転落した跡が点々と……。

猪瀬「(オフ)蛇……」

駐車場

文「え……」

猪瀬「蛇、ってさつきあなた言いましたね」

文「——」

猪瀬「彼の研究室、いっぱいいたでしょ」

文「——(見ていない……)」

猪瀬「女性には、縁があるんですね、蛇って」

文「(当惑)」

猪瀬「蛇の尿酸は皮膚の角質を柔らかくする効果がとても強いんだそうです。ヌケガラの皮もヒトそっくりの脂肪含有率だとかで、よく浸透実験に使われてるそうですよ。ネズミヘビ、とかって言ったかな」

文「——」

フラッシュ/夜の公園

文の踝を咬んだ、アオダイショウ——ネズミヘビ。

駐車場

猪瀬「守宮一樹の研究は、成功すればとてつもない金になる。

調べているのは私のとこだけじゃない。ただ、守宮の身辺調査までやってたのはウチだけなんです」

文「……」

猪瀬「——これは、私の個人的な忠告として聞いてくれると助かるんですが……、あの家——、あの男にはもう近づかない方がいい」

文 「どうして！」

猪瀬 「理由が判れば、私はとっくに報告書を上げて引っ込んでます（苦笑）」

文 「——お話はそれだけですか」

猪瀬 「——」

文 「理由が、あの妹にあるんだったら、あたしは——（決意）」

文、背を向け歩きだす。

猪瀬 「（オフ）ちよっと待って下さい」

文 「（振り向く）」

猪瀬 「——守宮一樹に妹なんていませんよ。戸籍上、彼は独り息子です」

文 「（愕然）『え……？』」

ゲラリ。

文の視界が、また歪んだ。

街の音が遠のいていく。

視野狭窄。

猪瀬 「（くぐもって聞こえる）文さん？ ちよ、大丈夫ですか」

額を抑え、汗をかいている文。

文 「——（呟く）あたしの躰の中で……」

猪瀬 「そこに私の車がある。送ります」

猪瀬を無視するかの様に歩きだす文。

猪瀬 「——」

文のマンション前／夜

脚を引きずる様に戻ってきた文、自分のマンションがいつもと変わらずそこに在る事にホッとされる。

文の部屋

ドアが開き、暗い部屋に入ってくる文。

電気を点け、荷物をテーブルに無造作に置いて、バスルームの方へ。

床には――、まだ乾いていない、人の皮膚を剥いだ様な皮が散乱している――。

バスに湯を満たす音が聞こえ始める。
出てくる文。

ぐつたりとカウチに腰を下ろす。

部屋のポスター――、隅の壁際の暗がりには、匡子が立っている。

しかし未だ文は気づいていない。

匡子は目を見開き、瞬きもせず文を見つめ続ける。
目を閉じて、頭をカウチの背にもたらせる文。

ふう……。

文――、バツと目を開ける。

背後に、匡子がすぐ来て顔を覗き込んでいた。

文 「（声にならぬ悲鳴）」

匡子 「一樹、どこにいるの？」

文 「――あ、あたし……」

文、必死に逃げようとするが――、躰が言う事を利かない。

文の目――蛇の目が文の躰を竦ませる。

匡子 「帰ってこないのよ、あの子……」

文 「『え……？』」

匡子、文の頬に、頬ずりをする。

匡子 「――綺麗な膚……。気持ちいい……」

文、必死に逃げ出したい。しかし、動けない！

匡子 「――一樹をとらないで……。あの子はあたしの子なの。

あたしが生んだ子なの」

文 「……」

匡子 「あたしは、一樹の母親なの。だから、いちばん一樹を愛せる。いちばん一樹を幸せにできる」

少女の声で囁く匡子。

部屋が暗くなっていく。

違う。文の視界がまた歪み、視野狭窄に陥っているのだ。
音がすべてくぐもり、現実感を失っていく。
呼吸が出来ない。必死に、小刻みに空気を肺に入れようとする文。
その視界の中で、白く、人ほどの太さの長い紐が床を這い回るのが見える。

文 「!?」

フラッシュ／白昼夢

黒いシルエットの、長い髪の女——
それを見ているのは——、文。

文の部屋

文 「うっ、うっ……うっっ」

文、痺れている躰を必死に奮い立たせ、立ち上がる
うとするも床に転がる。
床を這う文。
必死に——、必死に——

文 「!!」

ハッと自分の脚に振り向く。

黒い塊——、匡子が脚に組み付いていた。

文 「うっっ！ うっっっ！」

振り解こうともがく文。

しかし強靱な力で脚は抑えられている。

そして——、匡子が文の方に顔を上げ、た！

文 「！」

それはまさに蛇の顔をした女。ぬめぬめと光る角質
の皮膚、細い針の様な瞳、口を開くと——、鋭い前
歯のみの口蓋。

文 「ぎゃあああああっっ！ ぎゃあああああっっ!!」
悲鳴を上げる事で呪いが少し解けるのか。

文、必死にもがき、匡子の手から逃れる。

中腰で玄関まで進んでいく文。

その背後を、まるで蛇が這う様に判然としない形の
匡子が追ってくる。

文 「いやああああ！ いやああああああ！」

ドアに手を掛けようとした時！

脚を掴まれ、倒れ込む文！

文 「あぐっ！」

頭部を床にぶつける文。

顔を歪め、脚を見る。

以前、ネズミヘビに咬まれたところ、そこを匡子が
牙で抉っている！

文 「あ……、あ……」

激痛に顔を歪める文。

顔を上げた匡子の牙から、青緑色の透明な液体が滴
り落ちる。

それを舌で嘗めとって、唇の端を歪めて笑って見せ
る匡子。

ぶわっ！

視界が突如、ハイキーに飛ぶ。

ぼやけていく視界。

その消えつつある中で、匡子の顔、元に戻って見え
る。

イメエジ

タイトルバックの、あの赤黒い混濁とした蛇と人の
絡むイメエジ。

ノイズの中に漏れ聞こえる吐息。

文の部屋／朝

玄関前の床に座り込んでいる文。
脚には傷跡、凝固した血。

文 「——（放心）」

夢、ではない。
しかし、現実でもない。

東都医科大ノキャンパス

蒼い顔をした文、学生たちを避ける様に中へ。

同ノ研究室棟

中庭を抜け、歩く文。
脚には包帯を巻いている。

研究室棟ノ廊下

手すりを伝わりながら、階段を上がってきた文。
守宮研究室に向かって歩く。

文 「……」

ドアが半開きになっていた。

文 「……」

そつと手で押す。
散らかされている部屋。
引き出しは全て開けられ、端末類は傾いている。

守宮研究室

感情の無い顔で部屋を見回す文。
ふと、見下ろす。

籠から出され、死んでいるウサギの脚だけが、落ちた本の間から垣間見える。
この時だけ——、文は哀しそうな色を目に浮かべた。

守宮邸

門の前に立つ、文。
もう、文には判っていた。
一樹はどこにも行っていない。
この家から出ていない。
強い顔で、中へ。

玄関

格子戸を開き、入ってくる文。
この屋敷には、瘴気が立ち込めている。

廊下

ミシ ミシ
音を立てて、奥へ進んでいく文。
既に視界は、これまで文を苛んだ幻視と混濁している。
しかし、文自身はそれを現実と受け入れた。
ふと、脚を止め、振り向く。

白昼夢

振り向く文は、住宅街にいる。
道の向こうには、蛇女が立っていた。

文

「――」
文、決然とそれに背を向け、再び歩きだす。

廊下

回廊を進んできた文、やがて、研究室の前に。
赤い光が内部から漏れている。
戻ってきたのだ。
文、扉に手を掛け――、一気に開く。

イメエジ

赤黒い混濁としたイメエジ。
人と、蛇が絡み合う。
吐息、濡れた膚が擦れ合う音――。

文 「やめて！」

実験室

赤い照明の実験室内。
大きな浸透圧タンクの蓋が開き、裸の一樹が半身を
中に入れている。
その背後から一樹を抱いている、和服姿の匡子。
一樹、力を失った目で文を見る。

一 樹「――文……」

文 「やめてよ！ いつまでこんな事してるのよ！」

一 樹「――仕方ないんだよ……。母さんは僕を愛しているから、
僕の抗ナーガ合成ウイルスを体内に取り込んでくれたん
だもの」

文 「意気地なし！」

一 樹「――ほんとにそうだ……」

匡子「あなたもあとでここに入れてあげる」

文 「――」

匡子「あなたはとっても綺麗。あたしと同じ苦しみを味わった
んだから、その綺麗な姿をずっと続けられる」

一 樹「（朦朧と、ぶつぶつと）――抗ナーガ合成ウイルスは浸
透圧タンクの中で、人体の角質層に定着させる。そのR
NA転写によりDNAを書き換えコピーしていきます。
この効果により人体の皮膚のアポトーシスは抑制され、
一種の不老化をもたらすものと予想されますが、現段階
ではラビットの実験段階に留まり……」

匡子「いい子だわ、一樹……」

頭を撫でる匡子。

文 「（悲痛）一樹さん！」

一 樹 「（ぶつぶつ）抗ナーガ・ウイルスは一種のE1Bウイルスで、ネズミヘビの持つレトロ・ウイルスを再合成して獲得する事が可能です……」

文 「一樹さんを離して！」

一 樹 「（ぶつぶつ）」

匡子 「この子はずっとあたしといっているの。この子も歳をとらせない」

一 樹、腕を上には伸ばして、背後から顔を出している
匡子の頭を抱く。

勝ち誇った顔で文を見る匡子。

文 「やめ——（ハッ）」

一 樹、ぐつ、と匡子の頭を抱える腕に力を入れる。

一 樹 「（文に）そのスイッチを入れてくれ。お願いです」

文 「——（『やめて』と頸を振る）」

匡子 「かず……」

渾身の力で匡子の躰を自分がいるタンクの中に引きずり込む一樹。

匡子 「ぎゃあああ！」

一 樹、そのまま潜り込み、鉄の扉を自ら閉める。

ドオオオン！

匡子の片足が重い鉄蓋からはみ出している。

匡子 「ぎゃあああああ二 ぎゃあああああッ！」

呆然と立ち尽くす文。

苦悶に激しく動く白い匡子の脚——、それは蛇の頭
の様に見える。

文 「……」

感情を顔から消し、文、浸透圧タンクの脇にあるコンソール前に駆け寄り、出鱈目にスイッチを入れていく。

「ごおんんんんんんんん

鈍く唸りだすコンプレッサ。

タンクの中で淡い光が起こる。

白い蛇、必死に蓋を開けようとむがく。

バチバチバチ！

コンソールから火花が散る。

アナログの圧力計が跳ね上がり、蒸気があちこちで吹き上げる。

コンソールから散った火花、周囲の薬品瓶に引火。

部屋のうちこちで火が起こる。

悲鳴を上げ続ける匡子。

立ち尽くす文。

バン！ 扉を開け、入ってくる猪瀬。

猪瀬「何をしたの？」

文「……………」

猪瀬、タンクから漏れ聞こえる凄まじい声を聞く。

猪瀬「——これが一番いいのかもしれない……………」

文「……………」

猪瀬「ここは、あの親子だけの世界だ。あんたがいていいところ

じゃない」

猪瀬、文の手を引っ張り、部屋を出ていく。

文、一度振り向き——、出ていく。

代々木上原住宅街

並ぶ屋根屋根の向こう——、守宮邸から昇る黒い煙。

やや離れて、一言ふた言会話をし、別れる二人。

独り、歩きだした文——、

じつとそれまで堪えていた涙が、零れだす。

終わってしまった……………。

何もかも。

——そうなの……………？

溶暗

住宅街の道

白い午後。

ずっと、ずっと歩いていた。

蒼い文の顔から、感情というものが消失している。

ただ、今は――

ふと、文は視線を感じ、その方を見る。

小学生低学年の男の子。

住宅街の道の真ん中に立って、じっと見つめている。

その視線の先には――

陽炎の中に立つ、黒髪の女。

それは――、文。

見つめている男の子を見て――、微笑んだ。

終